

昭和三十六年三月

天皇の「人間宣言」草案秘話

憲法調査会事務局

この資料は、週間朝日別冊一九六一年一月号に掲載された同誌編集部・奥山益明氏の「天皇の人間宣言草案秘話」と題する記事を、印刷したものである。

憲法調査会事務局

は し が き

天皇の「人間宣言」草案秘話

十五年前後といふ、もはや歴史のことである。昭和二十一年一月一日、いわゆる天皇の「人間宣言」といわれる詔書が発せられた。「天皇は現御神ではない」という、時代離れのした詔書だったが、その起草に当たっては、数多くの混乱が秘められていた。

肺炎になつた幣原首相

昭和二十年十二月二十五日、この日は当時の大正天皇祭だったので、休日であつた。敗戦から四カ月たつていたが、東京に至るところに瓦礫が横たわり、おしりから煙を吐いて走る木炭自動車、気息奄奄と市中を走つてた。祭日といつても国喪を出している家は一軒もない。日の丸を掲揚することは、日頃から禁じられていたのである。

正午ごろ休日のため人気のない永田町の総理官邸に入つて行つたのは、幣原首相（故人）

と秘書官の岸倉松氏だつた。

幣原首相は総理室のデスクに向かつてたまま、秘書官をも退けた。岸秘書官がときどき様子を見に行き、もう三時間あまりというものの、紙に向かつてペンを動かしてつづけている。

冷えた室内からはコトリとも音がしない。ただデスクのかたわらの大きな窓から、すさまじい風がはいりこみ、幣原首相の背筋に吹きつけている。

時々窓が鳴る。外は木枯らしである。

幣原首相の書いてあるものは、二十一年一月一日に発する予定の「人間宣言」の詔書の英文草稿だつた。

大正天皇祭の休日を選んだのは、自宅にいと訪問客が多いため、この日、休日の総理官邸の静かなふんいきで執筆しようとしたのだろう。あるいは大正天皇の命日というところに、感慨を求めたのかもしれない。

夕刻までに推敲に推敲を重ねて書き上げた草稿は、サラ半紙に英文で三十枚あまりあつた。

総理官邸は休日だつたが、この日は恒例の忘年会があつた。首相が事務官から守衛らまでをねがうのだが、これまでの首相はほとんど秘書官任せの無礼講だつた。幣原首相は秘書官任せをきらい、六時ごろから会議室の宴会場に出た。

「ことは総理が出席された」と、一同大よろこびで、余興のかくし芸や民謡までとび出した。

幣原首相が岸秘書官と自動車に同乗、世田谷区岡本町の自宅に帰つたのは、もう夜も十時過ぎになつてた。

「どうも頭が重いようだ、変だなあ」

こう言う幣原首相の顔をみて、岸氏も少しおかしな感じがした。とにかく七十四歳の老首相のことだし、十月に組閣してから、休む暇もない業務である。

「お疲れになつたのでしよう。お熱があるようでしたら、橋本先生（聖路加病院院長、幣原氏特任）をお呼びしましょう」

幣原首相の様子を見て、岸秘書官はふと思ひ当たることであつた。きょう、官邸の総理室で首相が向かつていたデスクのわきから、すさまじい風がはいりこんでいたことだつた。

その夜、幣原首相は高熱にうなされた。やはりすさまじい風がもとで肺炎になつてしまつたのだつた。翌二十六日、これを知つたマツカサ元帥から、当時貴重薬だつたペニシリンを贈られた話は有名である。

幣原首相の肺炎のため「人間宣言」の草稿は起草されたものの、その後が面倒なことになつてしまつた。

ブライス氏の進言

幣原首相は組閣直後から、このような詔書を出して、天皇について内外の疑いを解いた方がよいと考えていた。

あるとき、天皇にお目にかかつて、天皇の方からお言葉があり、その中で「昔ある天皇が病氣にかかれ、天皇が医者をつれて来い、といわれると、宮中の連中が」といふこともないことだ。天皇は神様でいらつしやる。それを医者などに玉体を触れさせるといふことは絶対にいけません」ということで医者を呼ばなかつた。そのため、その天皇はみづから絶対にはげません」ということで医者を呼ばなかつた。そのため、その天皇はみづから絶対にはげません」ということで医者を呼ばなかつた。

すみず病気が悪化してなくなつたということがあつた。とんでもないことじゃないか」といわれ、暗に「人間宣言」をほめられた。

そこで幣原首相は、年頭に詔書を出すことについて天皇のお許しを得たのであつた。

天皇が神様扱いされるのをきまつておられたのは、何も戦後からではなかつたようだ。

侍従次長だつた木下道雄氏はこう言つてゐた。ある高官が「陛下は神様であつたから……」と申し上げたとき、陛下が「わたしは神様ではない。人間のオーガン（機能）を持つてゐる」とおつしやつたことがありました」

幣原首相が「人間宣言」を出す考えを持った根底には、天皇の地位を守り抜こうという信念があつたことはいふまでもない。

すでに十月二十一日には日皇のカーペンター大佐が「もし確証がある場合は、天皇を戦争犯罪人として審問することに不都合はない」と言明したり、中国から日皇に提出された戦争犯罪人名簿の筆頭に天皇の名が挙げられていると伝えられていた。

国内でも天皇の戦犯論や退位論はかまびすしくなつてゐる折りで、内外に「人間宣言」をすることは、天皇の地位の防壁にならうという気持ちには濃厚だつた。

幣原首相はこの気持ちに力を与えた一人に学習院大学教授ブライス氏がある。ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。

「ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。後になつて知りましう」と当時の文相前田多門氏は言つてゐる。「一昨年、私がニューヨークへ行つたとき、旧知のヘンダーソン氏（もと日皇の教育課長）に会いましう。その時、談話したまゐる詔書のこと」

に及ぶと、彼は会心の笑みをもらし「英はあれについてはブライス氏とたびたび話し合ひ、いわば片棒をかついでいたんです」と言つていました。ブライス氏は、尊敬する学習院長山梨勝之進氏を通じて、非常な好感を得ていたマツカサ元帥も「宣言」については期待してゐたようだ。

大正天皇祭の休日に、幣原首相がすさまじい風が吹かれながら書日前に前田多門氏に頼んで書いてもらつた草案をもとに、念に英文の草稿であつた。

詔書の草稿がなぜ英文で書かれたか。われわれの感じでは、マア、これはダイク代官の事務室で調理されたもの」と述べてゐるが、これは当時の日本としてさもありそうなことでありながら、全くの誤りである。あるいは幣原首相が書いた

英文で書かれた詔書草案

大正天皇祭の休日に、幣原首相がすさまじい風が吹かれながら書日前に前田多門氏に頼んで書いてもらつた草案をもとに、念に英文の草稿であつた。

詔書の草稿がなぜ英文で書かれたか。われわれの感じでは、マア、これはダイク代官の事務室で調理されたもの」と述べてゐるが、これは当時の日本としてさもありそうなことでありながら、全くの誤りである。あるいは幣原首相が書いた

すみず病気が悪化してなくなつたということがあつた。とんでもないことじゃないか」といわれ、暗に「人間宣言」をほめられた。

そこで幣原首相は、年頭に詔書を出すことについて天皇のお許しを得たのであつた。

天皇が神様扱いされるのをきまつておられたのは、何も戦後からではなかつたようだ。

侍従次長だつた木下道雄氏はこう言つてゐた。ある高官が「陛下は神様であつたから……」と申し上げたとき、陛下が「わたしは神様ではない。人間のオーガン（機能）を持つてゐる」とおつしやつたことがありました」

幣原首相が「人間宣言」を出す考えを持った根底には、天皇の地位を守り抜こうという信念があつたことはいふまでもない。

すでに十月二十一日には日皇のカーペンター大佐が「もし確証がある場合は、天皇を戦争犯罪人として審問することに不都合はない」と言明したり、中国から日皇に提出された戦争犯罪人名簿の筆頭に天皇の名が挙げられていると伝えられていた。

国内でも天皇の戦犯論や退位論はかまびすしくなつてゐる折りで、内外に「人間宣言」をすることは、天皇の地位の防壁にならうという気持ちには濃厚だつた。

幣原首相はこの気持ちに力を与えた一人に学習院大学教授ブライス氏がある。ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。

「ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。後になつて知りましう」と当時の文相前田多門氏は言つてゐる。「一昨年、私がニューヨークへ行つたとき、旧知のヘンダーソン氏（もと日皇の教育課長）に会いましう。その時、談話したまゐる詔書のこと」

に及ぶと、彼は会心の笑みをもらし「英はあれについてはブライス氏とたびたび話し合ひ、いわば片棒をかついでいたんです」と言つていました。ブライス氏は、尊敬する学習院長山梨勝之進氏を通じて、非常な好感を得ていたマツカサ元帥も「宣言」については期待してゐたようだ。

まず前田多門氏が草案

十二月二十三日、それは日曜日であつた。文相前田多門氏が草案に出かけようとしてゐるところへ電話がかかつてきた。総理大臣官邸から「ちよと来てくれ」というのである。

官邸には幣原首相が来ていて、前田文相に英文で書かれた二、三枚の手紙を見せた。これはブライス教授の進言であつた。

幣原首相は、

「十、十一、十二と三カ月間政権を担当してどうやら人心も少し安定したし、日皇との間もうまくいふやうだ。この際、陛下ご自身が「自分は神の末裔ではない」とおつしやることが一ばんいいと思ふのだが……」と言つた。

前田文相もその意見に賛成すると、幣原首相は詔書の起草を依頼した。

それは大役であつたので、前田文相は内閣書記官長久田大三郎に任せて起草にかつた。

勅語には固有の言いまわしがある。しかし通常の勅語と違つてつてもらわなくてはならない。「教育勅語にかつて、国民の徳を思つて、私は謹んで起草しました」と前田多門氏は言つてゐる。

英文で書かれた詔書草案

大正天皇祭の休日に、幣原首相がすさまじい風が吹かれながら書日前に前田多門氏に頼んで書いてもらつた草案をもとに、念に英文の草稿であつた。

詔書の草稿がなぜ英文で書かれたか。われわれの感じでは、マア、これはダイク代官の事務室で調理されたもの」と述べてゐるが、これは当時の日本としてさもありそうなことでありながら、全くの誤りである。あるいは幣原首相が書いた

すみず病気が悪化してなくなつたということがあつた。とんでもないことじゃないか」といわれ、暗に「人間宣言」をほめられた。

そこで幣原首相は、年頭に詔書を出すことについて天皇のお許しを得たのであつた。

天皇が神様扱いされるのをきまつておられたのは、何も戦後からではなかつたようだ。

侍従次長だつた木下道雄氏はこう言つてゐた。ある高官が「陛下は神様であつたから……」と申し上げたとき、陛下が「わたしは神様ではない。人間のオーガン（機能）を持つてゐる」とおつしやつたことがありました」

幣原首相が「人間宣言」を出す考えを持った根底には、天皇の地位を守り抜こうという信念があつたことはいふまでもない。

すでに十月二十一日には日皇のカーペンター大佐が「もし確証がある場合は、天皇を戦争犯罪人として審問することに不都合はない」と言明したり、中国から日皇に提出された戦争犯罪人名簿の筆頭に天皇の名が挙げられていると伝えられていた。

国内でも天皇の戦犯論や退位論はかまびすしくなつてゐる折りで、内外に「人間宣言」をすることは、天皇の地位の防壁にならうという気持ちには濃厚だつた。

幣原首相はこの気持ちに力を与えた一人に学習院大学教授ブライス氏がある。ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。

「ブライス氏は英人であるが、非常に日本を愛した人であつた。後になつて知りましう」と当時の文相前田多門氏は言つてゐる。「一昨年、私がニューヨークへ行つたとき、旧知のヘンダーソン氏（もと日皇の教育課長）に会いましう。その時、談話したまゐる詔書のこと」

に及ぶと、彼は会心の笑みをもらし「英はあれについてはブライス氏とたびたび話し合ひ、いわば片棒をかついでいたんです」と言つていました。ブライス氏は、尊敬する学習院長山梨勝之進氏を通じて、非常な好感を得ていたマツカサ元帥も「宣言」については期待してゐたようだ。



